

世界遺産はいま

登録から3年

》(1)《

験道の「吉野・大峯」、
信仰の「熊野三山」、
密教の「高野山」。
半島の深い山岳にさ
られたそれぞれの霊
場は、参詣道でつながっ
ている。世界遺産「紀伊
山地の霊場と参詣道」は
古来、多様な神々を受け
入れてきた。それは、日
本人の古くからの宗教観
や精神性をいまに伝える
文化財でもある。
世界遺産登録3周年を
記念するシンポジウムが



世界遺産の登録から3年。杉木立に囲まれた熊野古道を歩くハイカーの姿は後を絶
ない(田辺市中辺路町)。

人が目指す聖地の未来

先日、大阪市内で開かれ
た。和歌山、三重、奈良
県で世界遺産の保全に携
わっている3人が、この
地が世界遺産に登録され
た意義や特異性につい
て、議論を交わした。

世界遺産登録地域は広
い。修験道を中心に発展
した大峯奥駈道、熊野詣
での人たちが歩んだ中辺
路や大辺路、江戸時代に
東国からの庶民が往来し
た伊勢路…。道は時代と
ともに移り変わり、沿道
の文化をはぐくみ、人々
に引き継がれてきた。

そういう人々の営みと
信仰、紀伊半島の奥深い
自然が響き合って、世界
にもまれな文化的景観を
生み出した。それが評価
されて世界遺産に登録さ
れた。そういう背景から
考えて、紀伊半島が持つ
精神性を知ることが大切
だと、奈良県吉野町の金
峯山寺宗務総長、田中利

典さんは強調する。
今年2月、三重県尾鷲
市に開館した県立熊野古
道センターは、開館から
5カ月で7万人以上が来
館した。センター長の花
尻薫さんは「ブームが過
ぎたら忘れられるのでは
という不安があった。だ
からこそ、センターを拠
点に、伊勢の人と県外の
人に交流してもらいた
い。それによって、世界
の宝物であるこの遺産の
意義を伝えていきたい」
と話す。

田辺市本宮町にある和
歌山県世界遺産センター
長の辻林浩さんは「道と
は、文化を運んで来るも
の」と主張。「地元で潜
んでいる文化や文化財は
まだまだたくさんある。それ
を掘り起こして、世界遺
産の付加価値を高めてい
きたい」と話す。
田中さんが注目するの
はユネスコ憲章。そこに

は、自国の文化やそれぞ
れの国の文化を知り、世
界の宝にすることで平和
な社会を目指すというこ
とが宣言されている。
その趣旨に照らすと、
いまの日本社会は「世界
遺産を、地域振興や観光
振興の観点から見過ぎて
いる」と田中さん。「登
録の意義は、社会が近代
化し変容する中で見失っ
てきた近代以前の人々の
営みを見直すこと。そこ
から、日本の持つ多様な
精神文化の価値を理解し
なければ」という。

「紀伊山地の霊場
と参詣道」が世界遺
産に登録されて、7
日で3年。その意義
を現地から考えた
い。
(1)の連載は芹沢
悠、蛭子みどりが担
当します